

私 の 工 夫

様々な言葉と出会う 授業づくり

県立岡山操山高等学校

教諭 難波 健悟



1 書き手としての読み手の 立場

令和2年に復刻された青木幹勇『第三の書く』では、1986年の国語科教育の実態について次のように述べられている。

読むことの指導（学習）における書くことの軽視、あるいは拒否などの事実は、指導上の大きな欠陥として指摘されなければなりません。

この指摘から30年以上が経過しているが、青木の指摘は結局、現場には届かなかつたのだろう。そ

れが復刻の意味であり、この度の学習指導要領の改訂も、それを象徴しているように思われる。

今回の改訂では、これまでの内容読解に傾倒した授業への反省から、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の領域の配当時間が大幅に増えた。つまり、学習者を表現主体として育成していくことが、今後の国語科教育に求められている。ただし、先の青木の指摘が、「書くこと」の学習の増加を企図したものではなく、「読むこと」の学習を支えるものとして書く活動を位置づけようとしていることには、注意しておかねばならない。無

論、「書くこと」の指導の充実は

必要であるが、同時に、「書くこと」との関連の中で「読むこと」の学習を位置づけなおしていくことも、新たな学習指導要領下の授業においては重要なのである。

例えば、学習指導要領「論理国語」では、「内容」の「読むこと」においては、「エ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること」とある。このように、書き手の特徴を分析し、そのような書き方をした書き手の意図を推論させることにより、学習者をより良い書き方に出会わせていくことが必要なのである。より良い書き手との出会いは、自ら書き手となる際の枠組みを学習者に与え得る。つまり、書き手の立場に立った読み手の育成が、より良い表現者を育てていくための「読むこと」の学習において重要なのである。

2 様々な声に耳を傾ける こと

ある単元の振り返りをさせた際の記述を引用する。

・文章の書き方にも筆者の伝えたいことが含まれていると知って感動した。

・これから事例や引用を読むときは、筆者がどういう意図でその事例を使用したのかを考えて、事例と主張は本当に結びついていのかということを意識するようにしたい。

・教科書で使われているような文章は、文だけでなく構成まで一貫して主張と揃えてあるのだから感心しました。また、筆者の経歴や職業までもが文章の書き方に反映されるという見方は今回気づいた。

内田樹さんと岩井亮さんの文章では、どちらの文章のほうが好きですか。理由と合わせて書きましょ。

岩井亮さんの文章のほうが好きであった。
 わかりきっていることだが、文章のわかりやすさは断然内田樹さんの方が上である。しかし、岩井さんの文章には「意外性」があった。それが本文に結びつくような適切な事例であったかどうかは別として、同じような文章が溢れているなかで独自性を見出すという点で岩井さんの文章の方が好きだった。
 現代に至るまで実に多くの本が出版され、意見が飛び交っている。そのため、大抵のことは自分が発見した気になっていても他の人によってすでに発見されているものばかりである。先人の知恵の中に埋もれてオリジナルが無いものに価値はないだろう。そもそも文章とは自分のオリジナルな考え方を人に伝えるためのものであるのだから他の人が言っていることをわざわざもう一度言わなければならないのだ。そのことを理解して自分のオリジナルを伝えようとしている岩井さんの文章は好きだったという点だ。
 語彙がないように言っておく。「先人と同じようなことを書いている文章には価値がない」ということを言ったが、決してそれは無価値なものではない。ただ無価値に近い性格を持ち合わせているだけである。世の中には同じような趣旨の文章が大量に出回っているが、それらが無価値だとは思わない。それぞれに少しずつ相違があって著者の思いの違いが多からずとも現れているからだ。その微妙なニュアンスの違いにこそ価値はあるのだ。人はそれぞれ違う人格を持っているのだから人格の数だけ微妙に異なる考え方が存在する。考え方、価値観というものは人と比べないとその意味をなさない。その証拠に価値観の英語は「Values」。複数形でしか表すことができない。よって価値観を他者に訴えかけることを目的とする文章においてその価値とはすなわち「相手との差」であるはずだ。だから、先人によって示された道筋に対して作られた論道の数、捻じ曲げた数が文章の価値である。だから他の文章に埋もれてしまうようなものは無価値の性格が強いのだ。
 その観点で見るとやはり岩井亮さんの文章のほうが価値があるということになる。内田さんの文章でも先人との対話を通じて自分のオリジナルを展開していたが、岩井さんのほうが明らかにぶっ飛んでいたと思う。いや、筆者の導いた結論だけみると内田さんのほうがオリジナルかも。わからない！
 面白い。文章も、何もかも承められるのはオリジナルティーなる差異なのである。私の文章も結局岩井さんという先人のあとについている無価値の性格が強いものなのである。

私は岩井さんのマルジャーナの実例を用いた文章も、そこにいんな意味が込められていることを知って、好きだなと思います。内田さんの文章で悪かれるところは、やはり具体例の多さです。マルジャーナの知恵では、主張と具体例の結びつきが一見すると見えにくく、わかりにくさを感じます。しかし、内田さんの文章は具体例がそのまま書かれていて読みやすいです。「ちょっと整理しますが」で私達とコミュニケーションをとったところに、最初気づかされたときには文章が立ちましたが（笑）、ちょっとユーモラス？を添えて好きだなと思いました。ただ私は内田さんの文章の具体例の身近さ、文章のわかりやすさだけに悪かれるのではなく、具体例の多さから内田さんの知識の幅を感じて、好きだなと思いました。著者の紹介の欄にもあったように、内田さんは幅広い学識を以て、自分の専門という枠にはまらないところがある。（今、たまたま借りた本が内田さんの著書らしきものだったのですが、サル化する世界、っていう題名がすごく面白い）。その内田さんの強みが現れているところが好きだなと思いました。

GoogleForms による振り返りの声

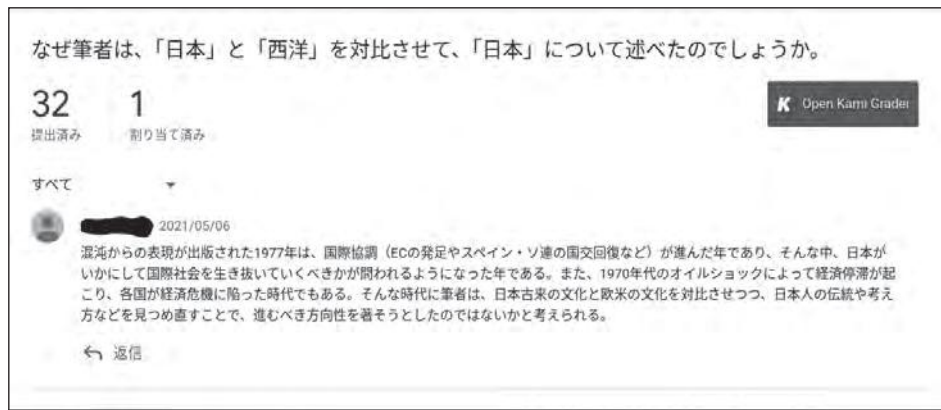
このような学習者の言語認識を育むために、日々の授業において稿者が特に留意していることを二つ述べる。

一つは、私たち自身が書き手の声と出会うことである。藤原顕・荻原伸は、深い学びを实践する上

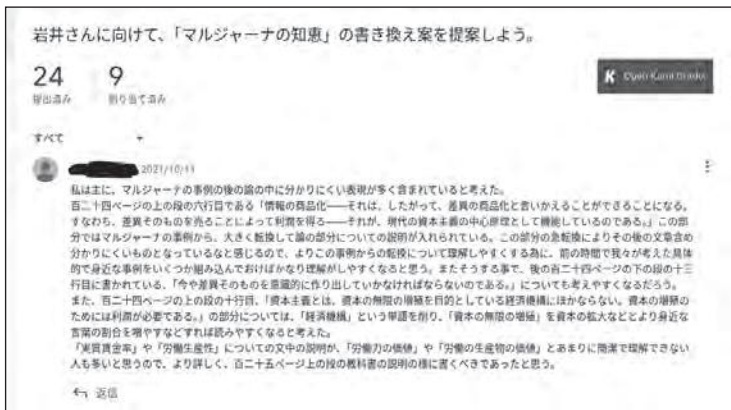
では、教師による教育内容研究（教材研究）が欠かせないと指摘している。文章の書き方の特徴は何か、書き手はなぜその書き方を選択したのか、事例の選択と書き手の立場との関係はないのか、引用の多用や題名の意味は書き手の主張とどのように関わるのか。例えばこうした観点を持ち、私たち教師自身が、書き手と出会うとする強い意志を持たねばならない。そして、粘り強く書き手の声に耳を傾けていかねばならないのである。

もう一つは、学習者の声と出会うことである。私たちはまず、学習者は読めない存在だという認識を捨て、学習者がどのように読んでいるかを丁寧に看取っていかねばならない。宮本浩治が指摘するように、学習者の声の中には、文章の核心を突くような気が付きが拙い言葉で表現されているからである。そうだとすれば、私たちの仕事は、読めない学習者に教え込ん

でいくことではなく、学習者の気付きの価値を見出し、適切に授業の中に位置づけていくことである。こうした視点に立ち、今の時代を生きる私たちは、改めて青木の問題意識に出会おうとするべきだ。



書き手の意図を問う声



書き方を批評する声

参考引用文献

- ・ 青木幹勇（2020）『復刻版 第三の書』・ 東洋館出版社
- ・ 藤原顕、荻原伸（2019）「深い学びを生み出すための豊かな教育内容研究」『深い学びを紡ぎだす』グループメディアクリエイティブ編、頸草書房
- ・ 宮本浩治（2015）「問いを形成する説明的文章を読むことの学習づくり」『国語教育研究（56号）』広島大学教育学部国語教育会